◆八木健　選

～峰崎成規『遊戯の遠景』（角川書店）を読む ③～

隠すより誘ふが本音麻暖簾

暖簾には、本来、目隠しの役割があり、陽射しや風を和らげる効果がある。麻暖簾には涼しさもある。粗い織だから暖簾の向こう側が透けて見える。それとなく隠すことで中を覗いて見たくさせる心理的効果も生まれる。作者は本音を見破っているのである。この暖簾の奥には素敵な商品がありますよなのか、美味しい物がありますよなのか。ちらちらと見せるチラリズムなのである。空間を仕切ってはいても、隔絶にはあらずなのだ。

真つ先に青き風船空が呑む

赤や黄色は、いつまでも空に溶け込まないで色が空の中に浮かんでいるが、青い風船はあっという間に同化して、空の青色に紛れてしまった。それを空が呑み込んだのだとした発想であり発見である。

第四章「ゴジラの心地」（二〇二一）

街を踏むゴジラの心地霜柱

霜柱を踏んだときの快感は、破壊本能をくすぐる。ゴジラになって街を踏み歩いたら、きっとこんな感触なのだろう。素直に共感できる愉快な句である。

冬帝の揺るがぬ玉座高気圧

西高東低の気圧配置がなかなか変わらない。冬帝がどっかと居座っているのだ。冬帝だから玉座である。なるほど、玉座の言葉は思い付かなんだ。

春眠の枕の凹み夢の跡

なるほどねえ。枕の凹みは夢の跡ですか。凹みが一つだったのか、二つだったのかによって、夢の種類が違ってくるねえ。

ウィンウィンの胡散臭さや亀鳴けり

「ウィンウィン」という商売のやり方や外交が果たして本当にあり得るのか。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

相手の口車に乗せられて騙されてはいないか、どうも胡散臭い。「亀鳴く」の季語にうまく呼応している。

河口まで晴着は解かず花筏

花筏を桜の花が晴れ着を着ているのだと見た。筏は実はよそ行きの衣装だったのだ。

ひとひらの花で閉ぢたる文庫本

野外に出て公園で文庫本を読んでいた。「花で」であって「花を」ではない。ということは、ここまで読みましたと桜の花のひとひらを栞にして挟んだのである。桜が、そろそろ休憩してはと言ってくれたようにも思える。

水平の菜の花空の喫水線

船は水に浮かんではいるが、船体の底面は水面下に沈んでいる。船体が沈んでいる深さを「喫水（きっすい)」と言い、積荷が増えるほど深くなる。喫水線は、船体が水面と交わっている線のことである。菜の花が空の中にあるのではなく、空が菜の花の海に沈んでいるのだという逆転の発想が見事である。菜の花畑の広大さも伝わってくる。

風鈴や遊び心の風を待ち

風鈴は、風が相手をしてくれない限り鳴ることができない。あーあ、もうちょっと洒落の分かる風は来ないかしら。このところ堅物ばっかでつまんない。チョイ悪の面白いのがいいんだけどなあ。ため息をつき、欠伸をしながら退屈を持て余す。ただじっと待つことしかできない風鈴であった。

弱虫を武将に変へる捕虫網

捕虫網は長刀のごとし。ひとたび手に持てば、たちどころに昆虫を捕獲する強力な武器になる。普段は弱虫だろうと、泣き虫だろうと、得意な分野では、別人になり、強気になる不思議。弱虫と捕虫網と、「虫」がかかっているのも楽しいね。

盆踊り輪に入り難し抜け難し

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

気楽な踊りだから出入りは自在と思いきや、そうではない。ゆっくりとした動きながら、規則正しく動いているところに途中から割り込むタイミングが難しい。抜ける時もまたしかり。入る時に輪の切れ目を見つけることも難しいし、切れ目を作らぬよう抜けるのも難しい。

投げ釣りの届かぬ先の鰯雲

これはオモシロイ句。「投げ釣りの届いて大漁の鰯雲」だったらいいね。

蔵書てふ二度読まぬ本秋ともし

「蔵書」と言えば聞こえはいいが、なんのことはない、読まず活用せず、ただ保管しているだけのことである。全く読んでいない本には気の毒と思うが、二度と読まない。それでも蔵書があるというのは、知的な暮らしには違いないね。

地の人とやうやく言はれ晦日蕎麦

この一年、地道にやってきたことが地元の人に通じたのである。「よそ者」だったのが「地の人」と呼ばれることになった嬉しさよ。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。